

勝山おもしろ読本第一集

幕末から明治の勝山町住居絵図



発行 勝山地区工口推進協議会

勝山おもしろ読本 第一集

『幕末から明治の
勝山町住居絵図』

はじめに

今回、勝山地区エコ推進協議会の事業の一環として、冊子第四刊「勝山おもしろ読本第一集『幕末から明治の勝山町住居図』」と題して編集刊行することができました。

江戸時代からの幾度の火災によって、元禄以前の古地図や住居図はほとんど見られませんが、小笠原氏入封以来の天保年間以後、幕末から明治までの勝山の町並みと住居図を、勝山市史や資料を参考にし一冊にまとめてみました。

小笠原時代が百年以上続いた長い歴史の中で、度々の大火と、人々の転入転出などがあり、また年代的においても異なると思いますが、その点ご理解願います。古図に記されているままの町名で書いておりますが、昭和四十七年後の住居表示に関する法律によって、古き時代の歴史ある町名がいくつか消えたことは、誠に残念です。

この冊子によって、その時代の流れと町並みを垣間見ることができ、我々の知らない古きよき時代を偲びながらご覧いただければ幸いであり、子供たちが勝山の町を知る教育の一環としてお役に立てればと存じています。

編集委員会

平成二十年一月

目次

小笠原勝山藩古図 1

袋田村から勝山へ 2

第一図 勝山城を取り巻く城下町
村から城下町への発展 4

第二図 家中武家屋敷住居図
お城を守る小笠原家臣屋敷 7

第三図 勝山本町住居図
勝山城のお膝元 本町 11

第四図 後町通り住居図
寺町から職人町へと発展 14

第五図 郡町・立石の住居図
勝山最初の町名 郡から立石へ 18

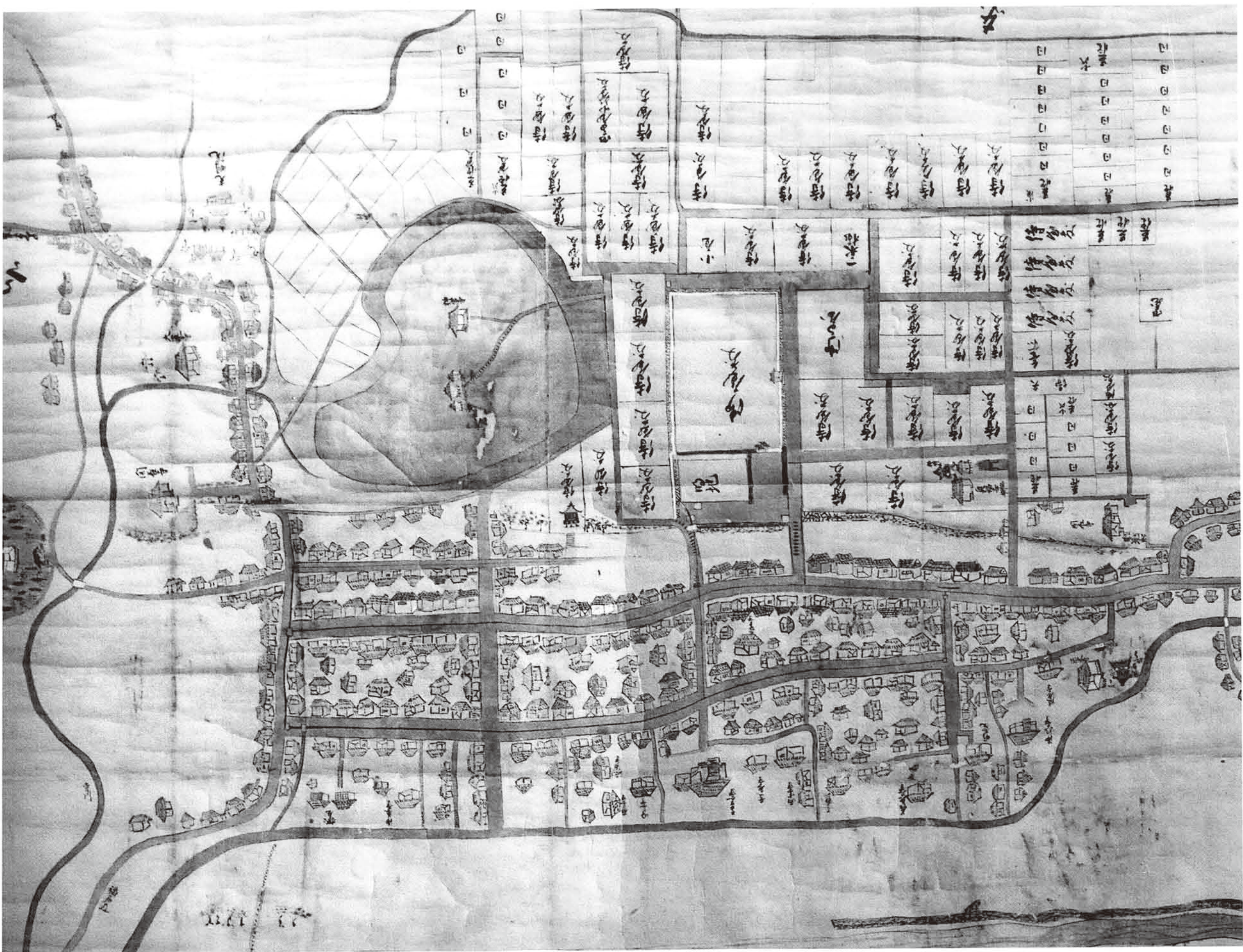
第六図 長渕・富田の住居図
松原新道から滝波村へ 22

第七図 沢町 芳野町の住居図
白山牛首への勝山古道 26

資料 町家と人口 30

編集後記 33

年代早見表	
年 号	西 暦
天 正	1 5 7 3年
文 禄	1 5 9 2年
慶 長	1 5 9 5年
(略)	
元 禄	1 6 8 8年
寛 永	1 7 0 3年
正 徳	1 7 1 1年
享 保	1 7 1 6年
元 文	1 7 3 6年
寛 保	1 7 4 1年
延 享	1 7 4 4年
寛 延	1 7 4 7年
宝 暦	1 7 5 1年
明 和	1 7 6 4年
安 永	1 7 7 2年
天 明	1 7 8 1年
寛 政	1 7 8 9年
享 和	1 8 0 1年
文 化	1 8 0 4年
文 政	1 8 1 8年
天 保	1 8 3 0年
弘 化	1 8 4 4年
嘉 永	1 8 4 8年
安 政	1 8 5 4年
蔓 延	1 8 6 0年
文 久	1 8 6 1年
元 治	1 8 6 4年
慶 応	1 8 6 5年
明 治	1 8 6 8年
大 正	1 9 1 2年
昭 和	1 9 2 6年
平 成	1 9 8 9年



右の絵図は、貞信が勝山に入部して数年後のものと思われる。北西には町家と寺院が描かれ、石坂・追手坂を上り、侍屋敷（家中）に通じている。侍屋敷には藩主の屋敷があり、その周辺には高禄の家臣の屋敷が配置され、貞信の長男一永（清信）の屋敷もみられる。また、離れた南東には軽輩の屋敷が配置されている。侍屋敷は長方形に規則正しく配置され、禄高によって区画の大きさが異なる。町中の道路と用水路も整えられている。

袋田村から勝山へ

かちやま

昔々、勝山盆地は北袋と呼ばれ、いくつかの村が点在し中心部の袋田村が町で一番古い地名だと伝えられています。

かちやま

天正三年（一五七五年）、越前国主柴田勝家は織田信長の命を受け、越前一揆討伐のため、勝家の一族と言われている柴田監物義宣を北袋に配し、ついで家臣佐久間盛次の三男で勝家の養子である柴田勝政（勝安）を義宣の養子として袋田村へ送りました。義宣が谷において戦死した後、七山家の一揆軍を討伐し、袋田村に袋田城を築いた勝安は、平泉寺を滅ぼした一向一揆軍が村岡山を勝山と呼んだ縁起を担ぎ、この城を「勝山城」と名付けたこと

かちやま

かちやま

から、現在の勝山の地名が誕生したことはすでに周知のことです。

かちやま

しかし天正十一年、豊臣秀吉軍と勝家軍が戦った柳ヶ瀬の役（賤ヶ岳の合戦）において、勝家軍に味方し出陣した勝安は戦死し、わずか六年で勝安のまちづくりは夢と消えました。

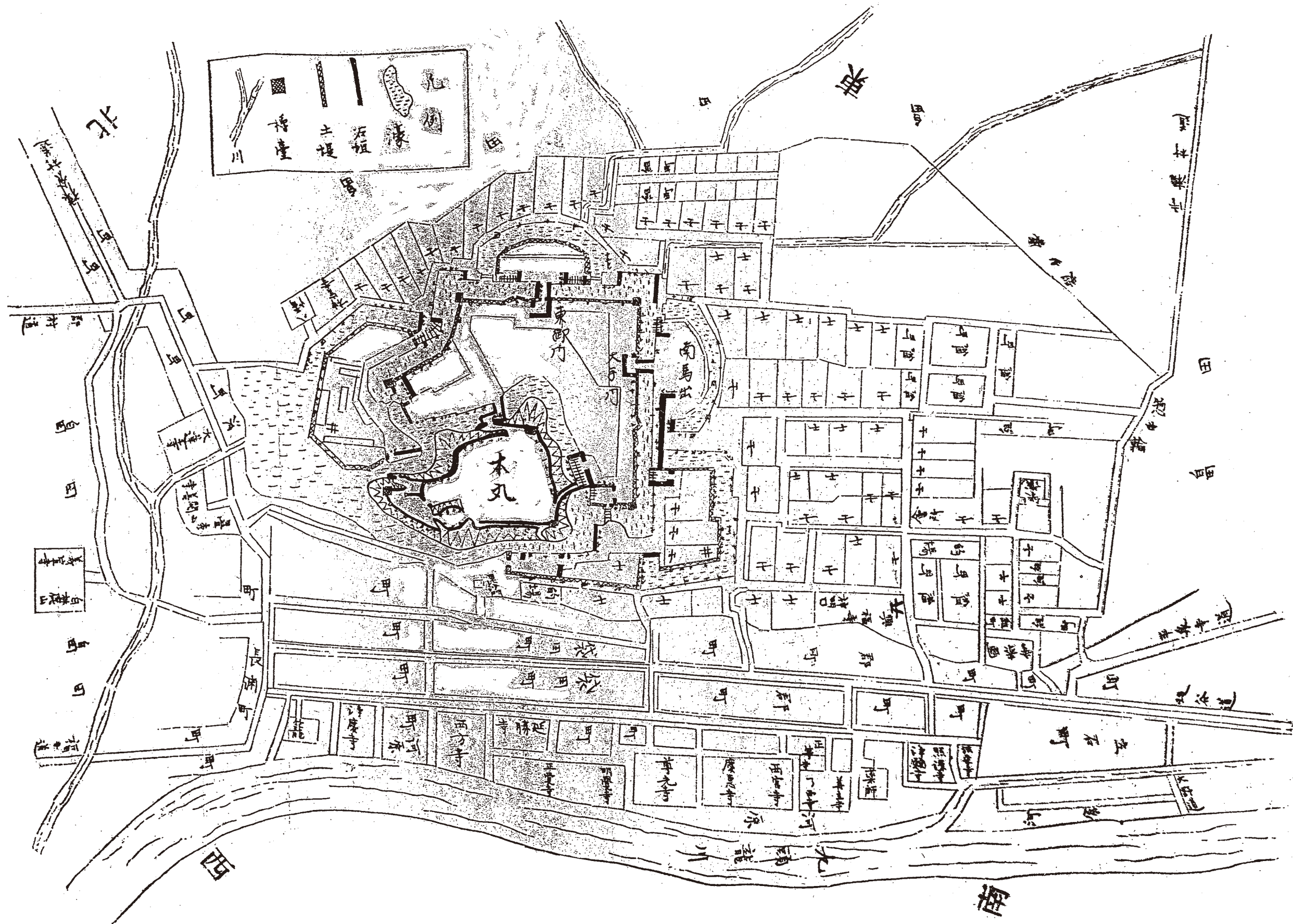
柴田一族滅亡後、時代は流れ、百余年の間、城下町として形成された勝山へ、元禄四年（一六九一年）、美濃より小笠原氏が入封し、それ以後幕末までそれぞれの地割が確立され、し

かちやま

だいに南は立石、北は長渕、北東の牛首街道には沢、芳野へと町が広がり、外地をも含め城下町として整備されました。

小笠原勝山藩古図は写実的で町家や寺院などがおもしろく描かれています。

かちやま



第一図 勝山城を取り巻く城下町 (慶長時代)

第一図 勝山城を取り巻く城下町

村から城下町への発展

勝山の城下は南北に続く七里壁上の東に武家屋敷が整備され、七里壁下の西側九頭竜川岸まで下町として寺院や商家に分けられています。この古図はおそらく慶長時代中期かと思いますが、図左上に八幡社と神宮寺と書かれていますが、これは白山社と光明院ではないかと思われます。八幡社と神宮寺は小笠原入封の際、南馬出の堀より東に建てられたと伝えられています。

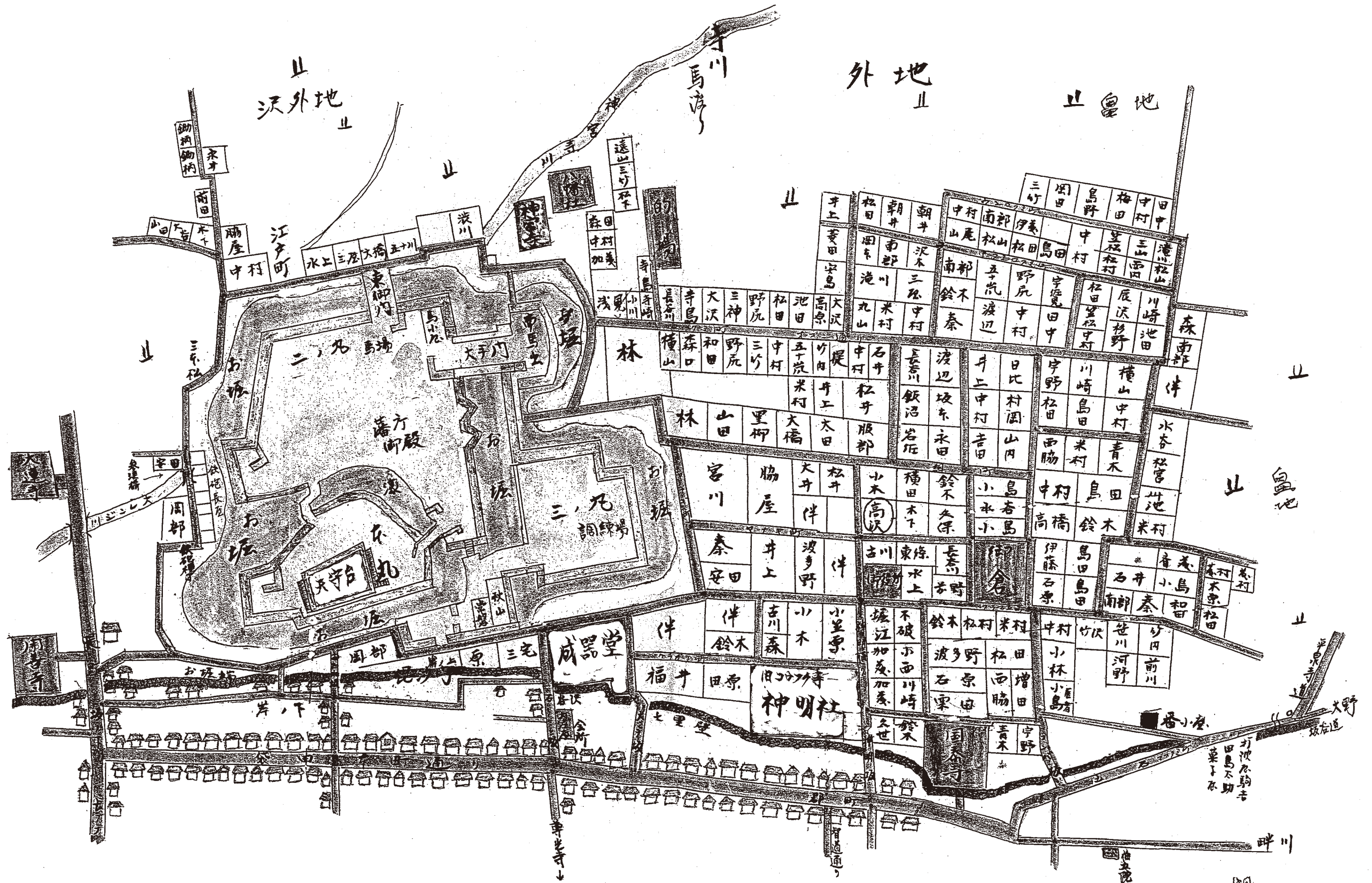
武家屋敷は士と書かれており、町名は組町と書かれています。会所や米蔵、的場が見られ、町中の道路は現在とほとんど変わっていません。

寺院の位置も現在と変わらないようですが、浄願寺は寛永時代、芳野に移り、法栄寺が建ちました。正等寺と西方寺は明治大火後、元禄に移りました。

また、慶恵寺は平成九年、立ち退きのため片瀬に移築されています。興福寺は廃寺となり、慶長十四年に神明神社が建てられました。城東の八幡社、沢の白山社が明治四年に神明神社に合祀されております。

幕末

第二図 家中武家屋敷住居図 慶応元年～明治3年（1865年～1870年）頃



第二図 家中武家屋敷住居図

お城を守る小笠原家臣屋敷

元禄四年、小笠原家が勝山に入封以後、町は確実に整備され、城より南に武家屋敷が立ち並び、北には鉄砲役人や鉄砲鍛冶職人が住んでいたという鉄砲横丁や、二の丸東の江戸町にも城を囲むように家臣の屋敷が見られます。すなわち元禄家中の地域であります。

家中ではお城近くより林、宮川、脇屋、安田、秦など家老職や重臣の屋敷が見られ、組町オコン通りには下級武士の住居があります。元禄の名は明治に入ってから地名と思われるま

すが元禄時代の名残でしょう。字名では、八幡、櫛形、源、堤、江戸、三本松、七本松などが書かれ、蔵前通り、柳通り、神明通り、鉄砲横町、クラガリ横町、オコン町などが見られます。柳町や柳通りは三の丸の敷地内にあり会所や米蔵も見られます。

元禄蔵前通りの山田家は今も武家屋敷の佇まいを残しており、また、昭和三十年代まで、柳通りの前川算盤塾の旧家も武家屋敷の名残が残っていました。

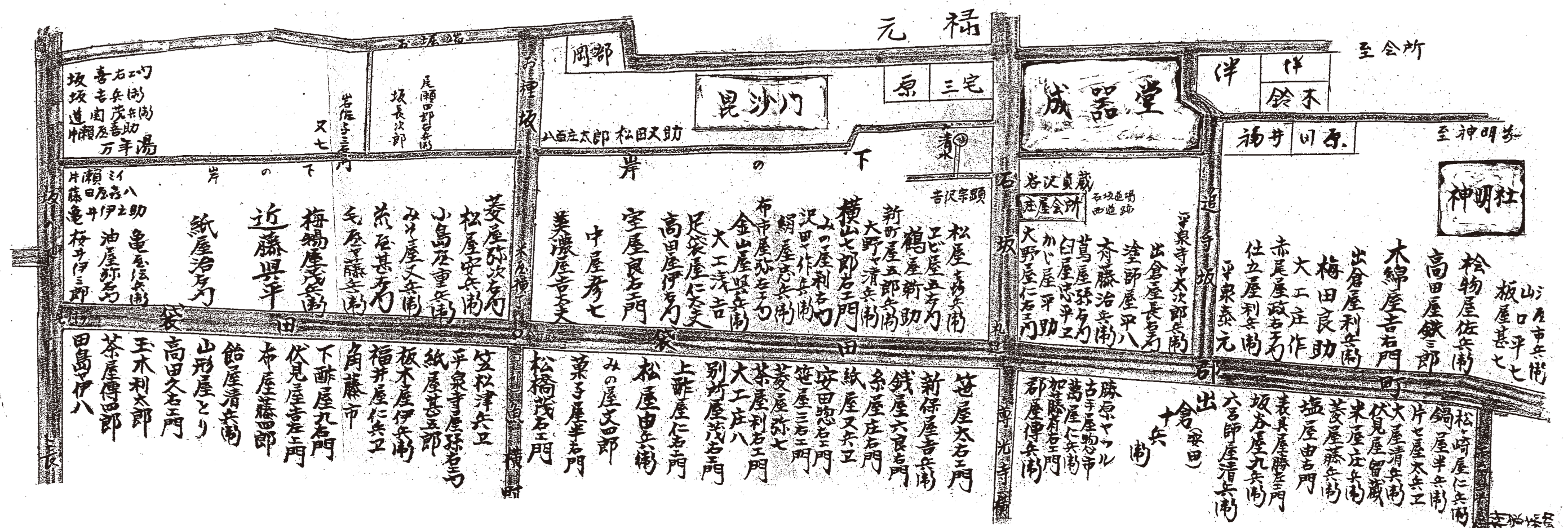
会所前通りの高沢家（藩医）の屋敷は、平成九年まで残っていましたが、その後大行寺が建てられ、蔵座敷だけが現在も残っています。

屋敷地の外側には外地（替地）と呼ばれ、農家の田畑となっており外地神宮寺川の上流は

湿地帯で馬渡りと呼ばれる字名がついていました。

明治から大正にかけて、たばこ作業場から機業に転業した兄弟会社や山岸機業などが三の丸付近に建ちました。

第三図 勝山本町住居図



第三図 勝山本町住居図

勝山城のお膝元 本町

勝山城のお膝元であつた袋田町を本町と呼んでいますが、ここも昔は農村地帯で水辺に囲まれた袋状の田であつたと思われます。慶長の頃から元禄時代以後、次々と商家が集まり、一つの町として賑わつていきます。

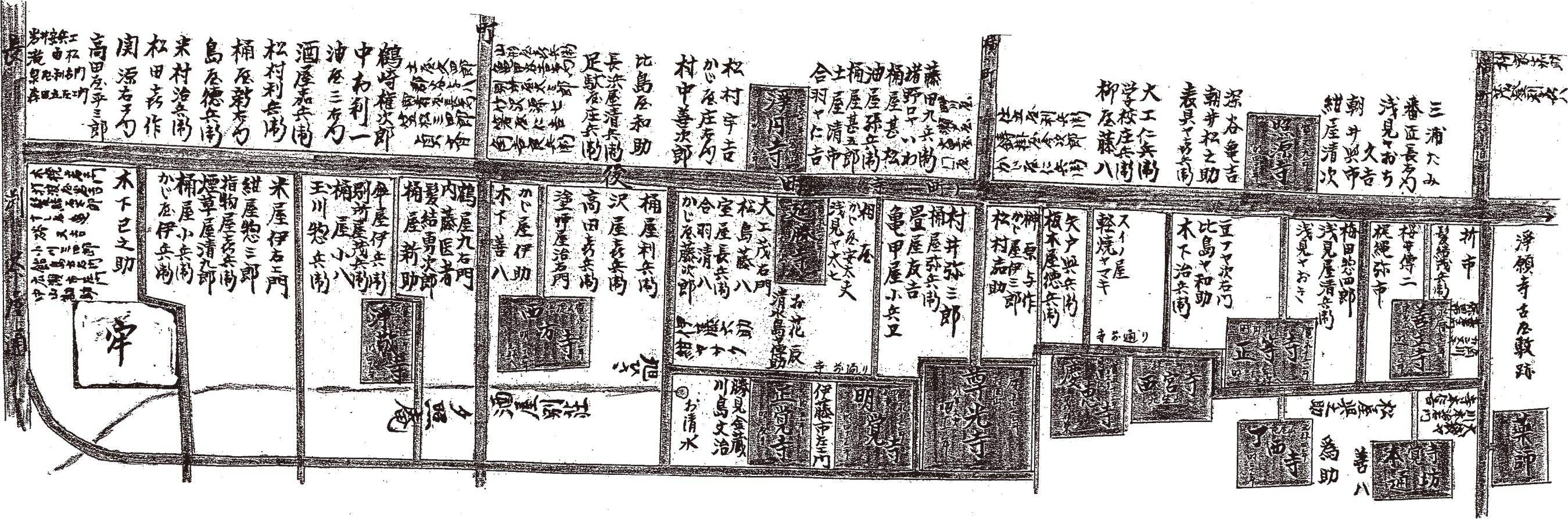
町制度が引かれ、何人かの町年寄が指名され、松村 由兵衛、室屋 良右衛門、横山 七郎右衛門、近藤 与平等の名が見られ、町庄屋の家も見られ現在まで続いている大店の名字や屋号

も数多く残っています。店名には名字を持たない町人たちが、扱う商品の名や出身地の村名をそのまま屋号や家名にしているのが分かります。

七里壁の上には成器堂や毘沙門、神明神社が建ち、岸の下、石坂には大庄屋会所の名もあります。お城へ登る大手坂、石坂、お種坂、坂の下各坂道も完成されています。

この町中の住居図は、江戸時代幕末から明治初期に作製されたものと思われます。

第四図 後町通り住居図



第四図 後町通り住居図

寺町から職人町へと発展

袋田町の西南には、浄願寺が建ち、村岡山麓より尊光寺が移り、法栄寺、延勝寺、正等寺、西方寺など次々に寺院が建ち並び、寺町と呼ばれるようになりました。

近在からは職人たちが集い、仏具をはじめ、表具屋、桶屋、スイノウ屋、鍛冶屋などが店を構えるようになりましたが、ほとんど庄屋や地主などの借家だったと思われます。

亀甲屋 小兵衛や関 源右衛門、酒屋 嘉兵衛など町庄屋の名も見られます。

法栄寺から長洲までの寺町を、本町に対して後町と呼ぶようになり、上・中・下後と分けられたのは幕末以後だと思われます。

職人の町らしく職業を表す屋号が多く見られます。

本町から後町へ入る道には法栄寺前通り、雲平通り（智道横町）、尊光寺前通り、万智通りの名が見られます。

明治の大火後、正等寺と西方寺は現在の地に移り、平成九年、慶恵寺が片瀬へ移りました。了西寺は旧薬師の地に移っています。

上後薬師の横から、下後お清水の上の旧 西方寺までの細い路地は現在も残っていますが、

当時は寺前通りと呼ばれていました。

寺院の西側は九頭竜川の河原でしたが、明治以後花街として栄え、人々は河原町とか河原通りと呼ぶようになりました。

浄敬寺の付近を百人町と呼んでいたようで、遊郭や貸席、飲み屋が並び、堀名銀山の入夫や近郷近在の人たちなどが集まり、一晩で百人ぐらいの人で賑わったことからその名がついたそうです。

第五図 郡町・立石の住居図

勝山最初の町名 郡から立石へ

郡の名は、天正八年、勝安が袋田村に城を築いた時に、村岡城山麓の郡の地名をそのまま名付けたと伝えられています。

石坂を境に、南は郡町として商家が並び町年寄の出倉（安田）十兵衛や中村 吉右エ門、斉藤 治兵衛の名も見られます。

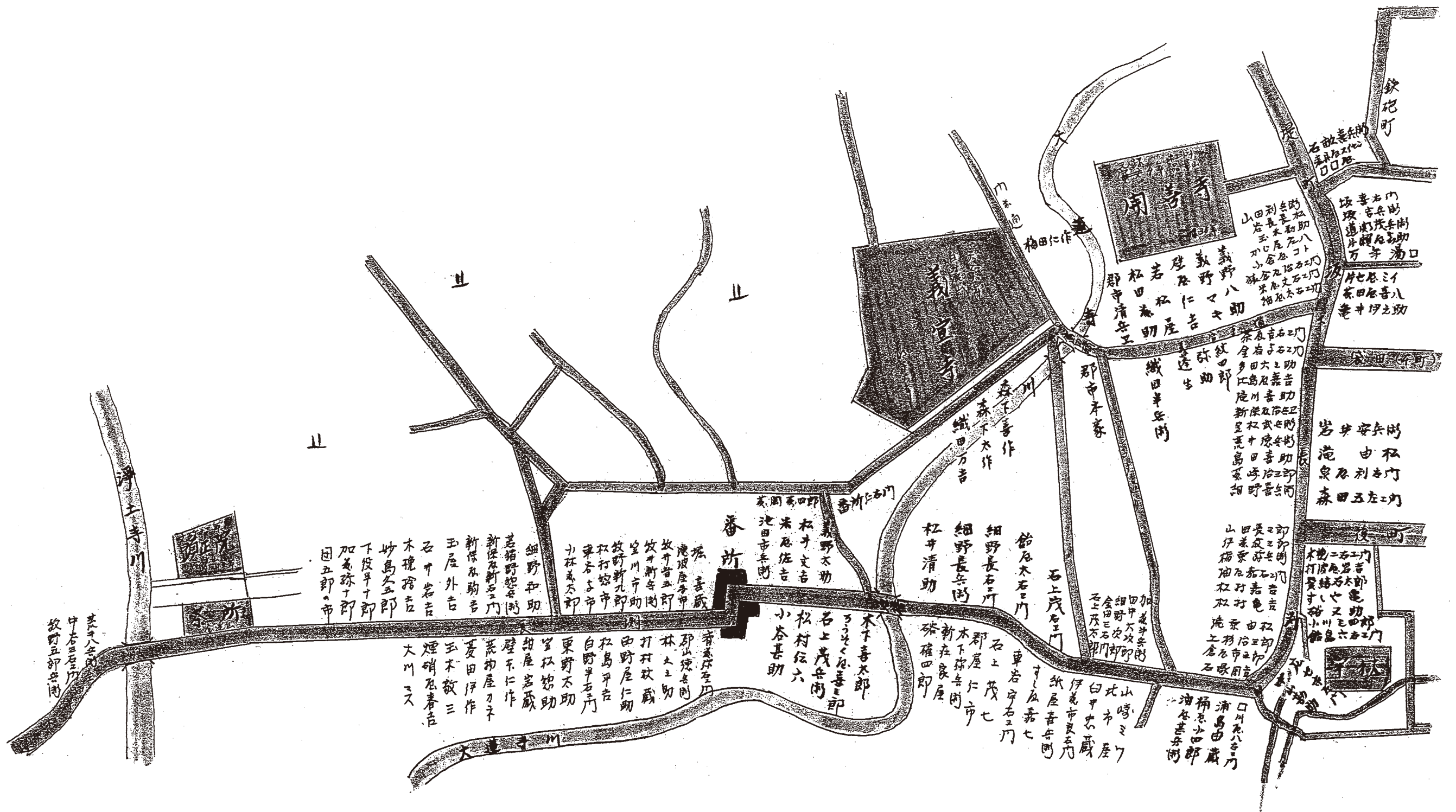
郡町の南から大野や平泉寺に進む地域を立石町と呼び、本通りの下は古くは畔川と呼ばれ、九頭竜川沿いに農民が集まり、袋田村から分家別れた人たちが住むようになりました。郡町から畔川までをマツクミ下町とも呼んでいたようで、伯立院の名も見られます。

大野へと進む立石道周辺にも、平泉寺や坂谷へ入る分岐点近くまで民家が並び新町の名も見られ、十王堂では左義長のはやし（ドンド焼き）も立ち、南の茶所とも呼ばれ、少し南の七里壁から元禄に入るところに番小屋の名が見られます。

立石の登り口から元禄へ進む坂を小姥母坂と呼び、坂の下からは鵜の島の渡しへの道が書かれています。松組町の名も見られます。

郡町には神明神社下に松ヶ崎屋 仁兵衛や板屋旅館、油屋 市兵衛、雲平通りには枡家 嘉助

なども見られ、神明坂、法栄寺横町、元禄の国泰寺に入る参道も書かれています。



第六図 長湊・富田の住居図

第六図 長渕・富田の住居図

松原新道から滝波村へ

本町下の見付けから上長渕の通りにも商家が並び、昭和の初め牛首へ行く馬車の停車場の前に茶屋があり、時間待ちの客で賑わったことから茶屋通りと呼ばれたと言われています。

多田 六之助の名前などが見受けられます。上長渕から北へ入る下長渕の道は、昔はもう少し九頭竜川寄りで川の渕で町が続いていたところから、長渕と呼ばれましたが、川沿いに松の木が繁っていたらしく松原新道の名が付いたと伝えられています。

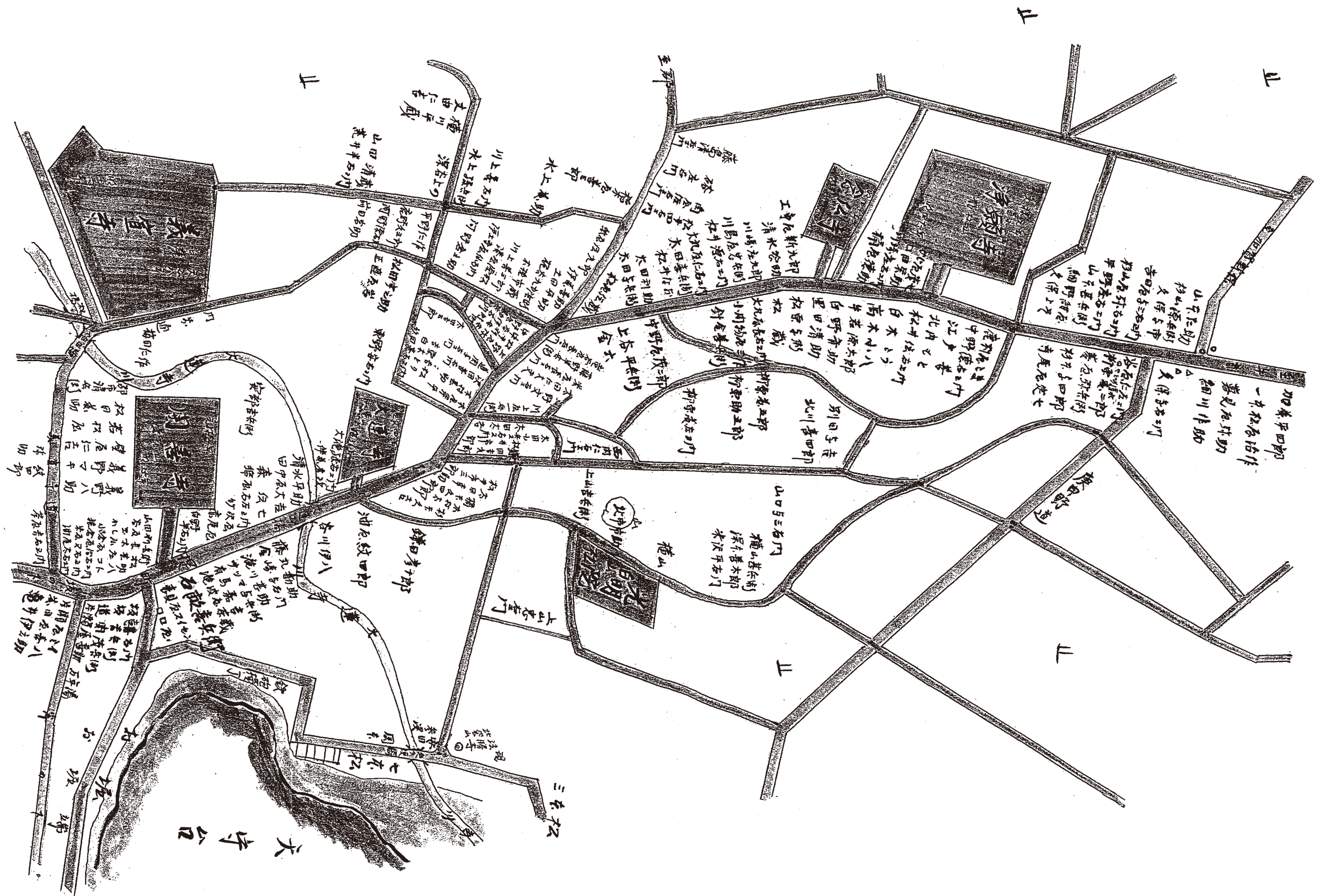
この道は滝波村を経て福井に行く重要な道だったので、人の往来も多くしだいに商家や職人たちが集い明治に入り織物業が盛んになり、機屋が軒を並べました。石上 茂兵衛（現大滝家）など現在も石橋のところに面影を残しています。松文産業もこの地で機業場を開設しております。

長渕の一番下に見性院が建っていますが、福井などから勝山に入る旅人に茶などを振まつたことから茶所と言われ、今でもお茶所と呼ばれて親しまれています。浄土寺川の長渕橋（茶所橋）を渡ると滝波村です。明治の大火は立川より失火して長渕まで全焼し、滝波村と新保村にも類焼するに至りました。町中の地図はおそらく明治大火前後と思われる。

長渕と沢の中間に位置する富田町の名は、この辺りは田畑に富んだ地であつたことからだと思われまゝ。柴田 勝安が義父 義宣の菩提寺として、七里壁の上に義宣寺を建立したことに始まり、富田城と呼ばれた義宣の館があつたと伝えられています。大蓮寺川に架かる義宣寺橋も昔は富田橋と呼んでいたそうです。

義宣寺の前を義宣寺門前道と呼び、本町見付けより富田に入る細い道には、門前町として商家などが建つて、義野 八助宅の名も見られます。寺町とは異なつた町で門前町の住人は地名子と呼ばれていたようです。

第七図 沢町・芳野町の住居図



第七図 沢町・芳野町の住居図

白山牛首への勝山古道

本町見付けから北東へ沢へと向かうのですが、山家口坂を登った辺りを堤町と呼び、お城の堀の堤にあたる所から名付けられた名であると思われます。山家口とは、町より山家へのことを言ったのかは定かではありませんが、昔はもう少し急な登りだったと思われ、その本町寄りのところは坂の下と呼ばれていました。

寛文四年、大蓮寺が建ち、元禄時代に入り小笠原家の菩提寺 開善寺が建てられ、人々が集まりはじめました。お堀の北側には武家屋敷が見られます。

沢はもともと沢外地と呼ばれ、清水が湧き農業を営む人が多く住み、勝山城の鬼門として沢に平泉寺末社の白山社、後に光明院が建てられました。久保酒造の細い道から上山家の前に出て光明院に入り、そこから長山の講武台へと向かう道があります。

光明院の後から芳野・庚申野へ進む庚申野道が見られます。

芳野から猿倉にかけての土地は庚申野と呼ばれ、町へ入るための魔除けの石像や祈禱場があったようで、昔から芳野ヶ原と呼ばれ、原野であったようです。

寛永年間に浄願寺が袋田より移り、念仏寺が建ち、芳野も門前町として広がりました。商

人や職人が集まり、谷や牛首（白峰）などからも移り来て町として発展していきました。

芳野の道は昔から町から石川県白峰に通じる重要道路で白山道と呼ばれ、明和五年に「白山道・中の橋道」と彫られた小さな石の道標が残っています。また、野向から加賀新保への道でもありました。

現在も残る何軒かの家の名が見られます。

資料

町家と人口

享保七年（一七二二年）	五七五軒	
宝暦六年（一七五六年）	六六四軒	
享和元年（一八〇一年）	八一八軒	三〇二〇人
天保二年（一八三一年）	一〇〇五軒	三七二三人
安政五年（一八五八年）	九六五軒	四〇三一人

昭和十年一月 勝山町国勢調査表より

【地区】	【戸数】	【人口】
下元緑	四六三	一二七九
上元緑	三三六	一六三四
立石	二二三	一一九五
郡	六四	三五四
上袋田	八五	四二七
下袋田	一二六	五九一
上後	九四	三八七
中後	一〇七	四七九
下後	一七〇	八二五
上長渕	一四二	七二〇
下長渕	一〇一	五二〇
富田	一〇四	四九三
沢	二四八	一一九三

猪野口	若猪野	毛屋猪野	高島	上芳野	片瀬	芳野
二七	五六	五二	三七	一九	六九	二五六
一六五	三二一	二九五	二三三	八八	四〇四	一二八一
合計	二七七九	一三八八四				

編集後記

幕末から明治の勝山住居絵図を編集しましたが、明治以降百四十年が過ぎ、現在も同所で継がれている商家も見受けられますが、ほとんどは移転されており、長い歳月の流れがつくづく感じられます。

もし明治二十九年に勝山の大火が起きなかったら現在も昔の城下町の姿を残し、家は建て替えられたとしても白壁の土蔵や武家の門、老舗の店構えなどの写真等が多く残されていたことでしょう。

すでに昭和も遠くなり、明治・大正の生まれの方もほとんど亡くなられ、当時のことを聞くことすらできませんが、この絵図で勝山町の昔を偲んで下さい。

現在八十代から五十代の方には、昭和中期の住居図の方が懐かしく興味深いことと存じますが、次の機会に編集させていただくことにいたします。

平成二十年一月

勝山地区エコ推進協議会

会長 丸屋 仁志

参考文献

勝山市教育委員会 図説「勝山市史」
勝山市教育委員会 所蔵 「勝山城下絵図」
福井県大野郡誌 下編 「旧勝山城下絵図」
勝山神明神社拝殿扁額 「勝山町国勢調査表」

勝山おもしろ読本第一集
幕末から明治の勝山町住居絵図

編集・発行 勝山地区エコ推進協議会

文 丸屋 仁志

勝山市文化財保護委員

協力 勝山公民館

発行月 平成二十年一月